

社会言語学の再構築に向けて

—「人種」の主要概念化—

源 邦彦

要 約

社会言語学, より正確には, 米社会言語学は1960年代に誕生したと言及されることが多い。それは社会的存在としての言語を取り戻すこと, 搾取, 抑圧された言語変種を救済することを目的の一部としていた。しかしながら, 社会学やほかの社会諸科学と同様に, 国家主権と既存の人種階層化された世界秩序を正当化するより洗練されたディスコースを生産し始めたのである。そのディスコースによって, 搾取, 抑圧された変種とその使用者はある部分では救済されることにはなったが, 根本では既存の人種階層化された秩序に拘束されることになったのである。本稿は当時の社会学的ディスコースがどのような点で萌芽期の社会言語学と一致していたのかを論考する。既存の歴史的研究や社会学批評では採用されなかった批判的人種論の視座から社会学と社会言語学の一致点を明らかにしたい。最終的には, 搾取, 抑圧された人種集団の言語変種と言語問題に関する一層の理解に資するべく, 社会言語学の主要概念の一つとして「人種」を社会言語学に導入するための論拠を提供できればと願っている。

キーワード: 社会言語学, 社会学, 人種, 搾取, 抑圧

1. はじめに

アメリカ合衆国の白人学者集団による社会言語学, 広く見れば社会科学は, 特に第二次世界大戦以降, そしてアフリカの年と言われる1960年前後を境に, 植民地搾取システムの代替システムとそれを支える代替ディスコースを築くべく, 国内外で政府や慈善団体の莫大な投資の下で発展した (cf. Arnove 1980; Bonilla-Sylva 2001; Phillipson 1992)。戦後の冷戦プロパガンダキャンペーンの中で, 「自由・平等・民主主義」イデオロギーを国内外に吹聴していた合衆国は, 自国内に蔓延しかつ根付く「人種主義 (racism)」(搾取, 抑圧行為を含む)¹⁾ とそれに支えられる人種階層あるいは不平等を世界各地から自己矛盾として指摘されていた (Bell 1980)。その外交圧力に屈するかたちで「人権」ではなく「市民権」を特に非白人諸集団に法的には保障する手段に出た。その一方で, 白人至上主義的経済, 政治, 社会構造の維持を可能にする, 搾取的, 抑圧的社会体制を構築したのである (Delgado & Stefancic 2017)。被抑圧人種諸集団の分

離独立を阻止し、白人社会—通例「アメリカ社会」と呼ばれる—に、それら非白人諸集団の中でも白人社会に懐柔される傾向にある少数をエリートとして取り込んだ (Bailey 1973; Lind 1995)。これによって「機会の平等」—「結果の平等」ではない—を強調できたのである (Metzger 1971; Vander Zanden 1973; Williams 1992²⁾)。そして、誰もが陥りやすい人種主義的認識、信念を科学的ディスコースへと昇華させ、科学的権威としての知識体系 (主に社会科学) を通じて、非白人諸集団の大多数を二級、三級市民に維持する代替論理を構築したのである³⁾ (Blackshire-Belay 1996; Bonilla-Sylva 2001; Bonilla-Sylva & Iuberi 2008; Stanfield 1985)。

以上のような歴史的背景のもと、「旧式の人種差別は実際問題として継続しているように見えるにもかかわらず、政府、研究者、その他の人々はそれについては語らなくなって」いた (de Lepervanche 1980: 25)。人種主義を合理化するための代替論理を生産する、社会言語学を含む言語学、社会学、経済学、心理学など社会科学のディスコースでは、「人種 (race)」が分析概念として回避される傾向にあったのである (Bonilla-Sylva & Baiocchi 2001; Bonilla-Silva & Zuberi 2008; de Lepervanche 1980; Ladner 1973; 源 2021; Omi & Winant 1994; Thomas 2000)。確かに、18世紀後半から20世紀前半まで続いた肉体的形質に基づく人種主義的科学への反省から (Smedley & Smedley 2012)、あるいはそれが正当性を失う中で、白人学者は非白人諸集団の問題を扱うにあたり、善意の営みの中で「人種」を分析の視座から除外してきたのかもしれない (Bonilla-Sylva 2001)。このような解釈がある一方で、ナショナリスト運動が盛んになった1960年代、学者を含め学問を始めたばかりの非白人学生の多くが、白人社会学者が非白人諸集団を論じる際の認識、知識、解釈に異議申し立てを展開していた中で、白人学者が本当に善意から被抑圧人種諸集団の問題を扱っていたのか、非常に疑問が残る (cf. Davidson 1970; Ladner 1973; Record 1974; Rojas 2007)。いずれにせよ、そのような社会科学的潮流の影響もあってか、社会言語学はその1960年代の誕生時において⁴⁾、被抑圧、非白人諸集団の言語状況を分析する際、「人種」は主要カテゴリーには位置付けず、その代わりに「階級 (class)」「民族 (ethnic group)・エスニシティー (ethnicity)」「性」「年齢」「職業」など、人種という分析的視座の隠蔽を可能にする社会学で構築されたカテゴリー (e.g. Becker 1971; Deutsch 1965; Duncan & Duncan 1955; Glazer & Moynihan 1964; Gordon 1964; Kahl & Davis 1955; Johnson 1960; Lewis 1968; Mead & Mead 1965; Merrill 1965; Moynihan 1968; Parsons & Kenneth 1966) に準拠し言語分析を行ったのである (e.g. Ervin-Tripp 1971; Ferguson 1972; Fishman 1965, 1967, 1972b, 1972c, 1977; Giles, et al. 1977 Gumperz 1970; Hymes 1962; Labov 1969, 1972a, 1972b; Labov, et al. 1968)。この傾向は、これまで発表された社会言語学史研究にも読み取ることができる (e.g. Hazen 2010; 井出, 金丸 1986; Muysken 1985)。

白人社会が数世紀にわたって一般社会、学术界ともに構築してきた「人種」は、肌の色を中心とした身体の形状を基に、この人々が目にしたアフリカ、アジア、アメリカ大陸の人々を経済的、政治的、社会的劣位に位置付けることに貢献してきた (Smedley & Smedley 2012)。数世紀にわたり築き上げられた白人優位の経済社会構造の生産を可能にする人種主義的な制度、

行為、態度によって、現在でも非白人諸集団は白人至上主義的人種主義に苦しめられている。その一方で、その他者から強制された「人種」は、抑圧人種集団の意に反して、被抑圧人種諸集団がその搾取、抑圧に抵抗するための連帯を可能にし、人間的多様性の正当性を訴える重要なアイデンティティーとして、そしてその人種主義的搾取、抑圧の仕組みを露呈させる分析概念として確立しているという事実もある（e.g. Bonilla-Sylva 2001; Delgado & Stefancic 2017; Omi & Winant 1994）。それにもかかわらず、白人知識人のあまりに多くが「人種」を非科学的と糾弾し自らの研究ディスコースに取り込まないようにしており、現存する非白人諸集団に対する人種主義的搾取、抑圧のプロセスを的確に分析するための主要概念の一つを奪う結果になっているのである。

本稿は、萌芽期の米社会言語学がどのような点で社会学と「共犯関係」にあったのか、言い換えれば、どのように「人種」を基本的分析概念から排除していたのかを、1) 当時の白人社会学者のディスコース、2) 当該ディスコースの社会言語学との一致、の二部構成で論究する。社会学の代表的文献ならびに社会言語学研究に大きな影響を与えた人物による著作に焦点を当て、分析概念としての「人種」が社会言語学の形成期にどのように扱われていたのかを見てみたい。もちろん、その時代の代表的な社会学者、社会言語学者の限られた文献のみを扱うため、厳密な意味での一般性を引き出すことは難しいかもしれない。しかしながら、影響力の大きい学者による、一般概念や枠組みを扱う入門書を中心に論じるという点では、当時の各分野の大まかなトレンドをある程度は知ることとはできると考えている。そして、本研究において最も重要な点は、既存の社会言語学史研究では用いられることのなかった批判的人種理論（Delgado & Stefancic 2017）の枠組みを適用することで、被抑圧人種諸集団の認識論から出発した社会言語学の構築へ向け抜本的な再構築案が提示できればと考えている。

2. 米社会言語学萌芽期の社会学と分析概念「人種」

アメリカ合衆国では、1960年代前後の言語学を含む社会科学一般⁵⁾は、分析概念としての「人種」そして搾取、抑圧行為を含む「人種主義のプロセス」の分析を回避する傾向にあった（cf. Tumin 1968）。アメリカ社会の社会学的関心の多くを占めるはずの人種主義的社会システムの構築プロセスや経済的搾取を可能にする抑圧プロセスよりはむしろ、結果としての「不平等」「格差」「貧困」等に焦点を当てたのである。これらの状況は集団の人種主義行為というよりはむしろ個人の偏見、被抑圧人種諸集団内の教育文化、職業文化、経済環境等の結果、さらにはこの人々が引き起こした問題として解釈されたのである。人種問題は、「人種主義」「人種」ではなく「階級」あるいは「民族」が有する「エスニシティー」「文化」という他集団との非対称的関係性が排除された特徴にフォーカスを当てた問題として扱われ（cf. Isajiw 1974）、「人種」は「階級」「民族」の下位範疇として議論の水面下に送り込まれたのである（e.g. Becker 1971; Deutsch 1965; Duncan & Duncan 1955; Glazer & Moynihan 1964; Gordon 1964; Kahl & Davis

1955; Johnson 1960; Lewis 1968; Mead & Mead 1965; Merrill 1965; Parsons & Kenneth 1966; Rose 1956; cf. de Lepervanche 1980)。「人種」を分析概念として扱った場合でも、人種差別は、法律制度やより目に留まりやすい一部の特殊な白人集団（アメリカ南部社会）と個人の問題として片づけられ、あたかも白人社会一般がこの問題を克服しているかのように描きつつ（e.g. Becker 1971; Glazer & Moynihan 1964; Hauser 1965; Johnson 1960; Mead & Mead 1965; Merrill 1965; Rose 1956）⁶⁾、「社会進化論（social evolutionism）」をベースに白人社会の優越性を示唆する議論を展開したのである（e.g. Glazer & Moynihan 1975; Gordon 1964; Myrdal 1944）。社会学の主流派は、非白人諸集団の置かれた搾取、抑圧の状況を説明する際、人種問題に関して白人が抱く一般認識、信念を正当化し（MacKee 1993⁷⁾; Vander Zanden 1973）、分析概念である「人種」を軽視あるいは無視し、人種主義（特に行為に関して）の生産プロセスには目を向けなかった、あるいはそのプロセスにおける主要因間の因果関係を直視しなかったのである（cf. Bonilla-Silva & Baiocchi 2001）。

たとえば、ユージン・ミード、ファンチョン・ミードは、分析概念としての「人種」に関して以下のように断言する。

科学は、階層化の基本を成す、経済的、社会的、政治的権力の差異の根本が人種ではなく文化であることを明らかにしている（Mead & Mead 1965: 300）

人種差別の存在を認めながらもそれにはほとんど触れることはなく、子供の社会化パターンを含む非白人諸集団の「文化」がその人々の置かれた経済社会的窮状を生産していることを前面に押し出している（cf. Glazer & Moynihan 1964）。特定人種集団に広く行き渡っている何らかの経済社会的結果や行動パターンが、「人種差別」や「人種階層化」の結果（Bonilla-Silva & Baiocchi 2001: 125）であることを否定しているのである。たとえば、黒人のことばに関する社会言語学研究の多くは、あたかも黒人労働者階級やアンダークラスが使用する言語的特徴—すなわち文化—によって偏見が生み出され、その偏見が差別を引き起こすことを示唆している（e.g. Cross, et al. 2001; Hopper 1977; Kurinec & Weaver III 2019）。そのような文化的特徴に対する偏見の基底にある人種主義的搾取、抑圧自体を偏見の誘因としては説明しないのである。ミード等と同じく、人種階層化の主因を抑圧人種集団による「搾取」や「抑圧」に求めない白人社会学者としてハリー・ジョンソンがいる。彼は、人種概念を民族概念の下位範疇として扱い（cf. Gordon 1964）、白人集団と非白人諸集団のあいだの「頑強な人種分離状態」—白人集団による非白人諸集団に対する「頑迷な人種隔離行為」とは解釈しない—は、「相対的に明らかな人種の特徴（肉体的特徴）、人種的可視度」が原因であると解釈する（Johnson 1960: 494）。ここでは、肉体的特徴に基づいて経済的、社会的、政治的に搾取、抑圧されてゆくプロセスが全く考慮されていない。肉体的特徴から劣位に置かれた諸集団と白人集団との階級差を所与のこととして扱い、解決すべき問題としては議論していないのである。さらに、社会学者

ダドリー・ダンカン、ビバリー・ダンカン (Duncan & Duncan 1955) は、社会学の定量分析の際に用いられる「人種隔離指標」を、白人が人種主義的諸行為を通して構築する社会構造としては描かなかった。そのような構築プロセスから隔離状況が生産されたのではなく、諸々の状態（白人と非白人とのあいだの収入、職業、家賃の差異）が隔離状態の形成にどう影響しているのか、その逆方向の影響、隔離の度合いなどを議論対象としたのである。

社会学では、人間集団、とりわけ「社会階層 (social stratification)」を分類する概念として中心的役割を果たしてきたのは「階級」である。「人種」はその階級を構成する諸要因の一つに過ぎず、それが「階級」と同等またはそれ以上に大きなテーマとして扱われることはなく (e.g. Becker 1971; Mead & Mead 1965; Merrill 1965; Parsons & Kenneth 1966), 階級差を生産する変数としてはほとんど考慮されなかった (e.g. Haer 1957; Kahl & Davis 1955; Johnson 1960; Warner, et al. 1949)。さらに、階級を生産する主要因は「搾取」「抑圧」であるにもかかわらず、階級を生産する抑圧集団の存在を可視化するその生産プロセスの分析に議論が及ぶことはなかった。「収入」「家庭階級」「職業」「教育」「居住地」「態度」「文化」など階級を定義付けるいくつかの要因にフォーカスを当て、「階級」をライフチャンスを決定づける因子として捉えたのである (Mead & Mead 1965)。たとえば、「下層階級」の若者の非行、犯罪行為は、家庭内での行動パターンによって導かれたものとして描き、その階級間関係を生産する抑圧集団による「搾取」「抑圧」のプロセスが描かれないため、結果として「人種」が分析概念としては立ち現れなかったのである。「階級」は普遍的な現象であり、抑圧集団ではなく社会システムが課す、そこに属する人々が従うべき「役割」や「義務」が存在することが理論化され、あたかもそれらが道徳的、倫理的問題を孕まない所与の事実のように説明されたのである (e.g. Glazer & Moynihan 1975; Haer 1957; Kahl & Davis 1955; Johnson 1960; Parsons 1951, 1953; Warner, et al. 1949; cf. Durkheim 1933)。さらには、その階級集団間の関係性を「対立 (conflict)」「競争 (competition)」として双方向的現象として描き、集団関係の対称性が示唆された (e.g. Haer 1957; Kahl & Davis 1955; Johnson 1960; Mead & Mead 1965; Merrill 1965; Warner, et al. 1949)。人種集団間関係においては、抑圧人種集団が被抑圧人種集団を抑圧する、あるいは、被抑圧人種集団側が抑圧人種集団を攻撃するよう後者が追い込むなどの戦略が採られるが、これら主流派社会学者の分析では、抑圧人種集団側による直接的、間接的な抑圧という一方向性、権力関係の非対称性が隠蔽されたのである。組織的人種差別に携わる主体は、白人であることが明白であるにもかかわらずそれが明示されず、人種関係の進展に関して進歩ではないものが進歩として語られた。そして、職業差別は、基本的には「機会」にアクセスした後の「選考プロセス」に起因する「結果」の不平等であるにもかかわらず、もっぱら「機会」の不平等の結果として説明されたのである (e.g. Roucek & Warren 1966)。「階級」はこのような一方向性、非対称性を覆い隠し、「受容された不平等」(Mead & Mead 1965: 246) として解釈されてしまったのである。

そして、「階級」よりも深刻な状況を示す「カースト」によって黒人の状況を描こうとする

者も現れた (e.g. Merrill 1965; Rose 1956; Warner 1936)。たとえば、白人社会学者フランシス・メリルは、同時代の黒人の大多数の置かれた状況を「カースト」に位置付けた。「カースト」は「階級」とともに「階層」の一変異と捉え、階層システムを以下のように説明した。

第一に、社会階級は文化的パターンであり、社会の成員によって受容されている。そして、その成員を社会構造のある一般的な地位に割り当てる。第二に、社会階級は、成員の大多数の意思や意識的知識ではなく、伝統によって成り立っている。第三に、社会階級は、差別化された特権システムが関与し、一部の集団が社会の商品、サービス、権力、感情的満足了他者以上に入手できる状態にある。(Merrill 1965: 276)

ここには、搾取、抑圧集団の個々人が集団規模で、そしてその集団が所有する政府、企業等が一体となって執り行っている「搾取」「抑圧」のプロセスが全く描かれていない。あたかも、被抑圧集団自身がこの状況に自ら入り込み、この状況を自ら受容し、継続させているかのようである (cf. Metzger 1971)。このような階層の存在は社会の必然的状況として、個々人が自らの意思で努力し実力が伴えば社会階級間を移動できるという「可動性 (mobility)」の問題として扱われたのである。さらにメリルは、上述のカースト論者と同じく、黒人に関しては、リンチなどの暴力行為や公教育などでの人種隔離を一部(南部)の白人が行う所業として描いた。国家による住居差別政策など白人による組織的人種差別は過去のものとして描き(実際はこの影響は今日まで残り、特に民間では今日でも不動産差別は続いている (cf. Baugh 2005; McGrew 1997))、当時の白人社会一般による差別に関しては、他者による認識が比較的容易な差別行為—警察個々人による黒人男性の殺害など—のみを差別として描いた。すなわち、集団的搾取、抑圧行為は、少なくとも意識的、組織的、制度的レベルではもはや存在しないという架空の論理を裏付けようとしたと言える。

人種間の「階層」を論じるにあたり経済学的手法を用いた研究者もいた。ノーベル経済学賞(1992)の受賞者ゲイリー・ベッカーである。ベッカーは「非白人の高失業率は(中略)ほとんどの場合、この人々が失業を生みやすい職業に集中している結果である」(Becker 1971: 4)と解釈した。ここでは、白人雇用者、白人労働者からの差別行為が論じられてはいない。黒人への経済的差別を念頭に議論していることは確かだが、「非白人」や「マイノリティー」という被抑圧諸集団間の差異を曖昧にするカテゴリーが多用され、黒人への抑圧の度合いが不可視化されてしまう。そして、白人であっても白人から人種差別に会う可能性があることを引き合いに出すことで、黒人を含む非白人諸集団に対する人種差別との差異を解消しようとしているようでもある。この論理は他の社会学者にも見受けられる (e.g. de Lepervanche 1980; Glazer & Moynihan 1964; Gordon 1964; Mead & Mead 1965; Roucek & Warren 1966)。たとえば、ユダヤ人に対する抑圧行為は人種主義として語られ、あたかも黒人やメキシコ系アメリカ人への抑圧と同じ土俵にあることが示唆される。ところが、前者は現在は白人集団に組み込まれ白人社

会の支配的地位にあり、さまざまなかたちで黒人を抑圧してきたという史実を忘れてはならない (e.g. Ben-Eliezer 2004; Bush 2000)。さらに、白人による差別は「集団」「組織」「制度」ではなく「個人」レベルの問題であることがほのめかされるあるいは指摘される (cf. Rose 1956; Roucek & Warren 1966)。すなわち、人種間の集団レベルの問題ではなく「偏見を抱く個々人と犠牲となる個々人の関係」(Vander Zanden 1973: 39)として描かれたのである。しかしながら、差別は目に見えるかたちで組織化、制度化されていなくとも、家庭内やコミュニティ内など他者には見えない場面そしてメディアや教育を通じて集団規模で人種主義的諸行為が執り行われかつ継承される。司法や教育では人種階層化を可能にする非人種化されたさまざまな基準が構築される (cf. Alexander 2012; Duncan 2011; White 1984)。その結果、(たとえば、黒人には偏見を抱いていないとアンケートでは回答するが (Bonilla-Sylva & Forman 2000)) 個々人が集団規模であるいは諸制度を通じて経済、政治、司法、教育上の差別行為を行い、人種主義的社会秩序が再生産されてしまっている。つまり、人種主義は組織化されずとも集団的效果を生み出すことが可能であり、制度自体が人種という基準を明示していなくとも人種を基準とした階層化が可能なのである。そして、ベッカーは、人種集団間の境界線設定のために「人種」を集団名として使用するが、人種主義的社会秩序を構築するプロセスの分析には使用していないのである。この点は他の白人社会学者にも当てはまる (e.g. Deutsch 1965; Duncan & Duncan 1955; Glazer & Moynihan 1964; Kahl & Davis 1955; Johnson 1960; Lewis 1968; Mead & Mead 1965; Merrill 1965; Parsons & Kenneth 1966; Rose 1956)。

1960年代のこれらの白人社会学者は、白人による搾取、抑圧のプロセスが読者に意識され得る内容については突如として「人種」ではなく平等主義の主張が容易な「民族」を持ち出し、白人集団と比較し非白人諸集団の劣位を正当化する文脈では「人種」を持ち出す傾向にあると言えるかもしれない (cf. Bonilla-Sylva & Zuberi 2008)。場合によっては、明らかに「人種」と「民族」を区別して説明することが求められる場面でも、あたかも前者を含む総称のように後者を用いる。黒人とラティーノの混血社会学者エドゥアード・ボニラ＝シルバは、ほとんどの白人社会学者には悪意はないと言及する。しかしながら、偶然にしてはあまりにも巧妙な論理のすり替えが行われており、「人種」と「搾取」「抑圧」を統合した議論が回避されている点は見逃してはなるまい。筆者は、社会科学には客観的真実は存在せず、「真実は支配集団の目的のために創出される社会的構築物」(Delgado & Stefancic 2017: 104)にすぎないと考えている。文化、人種、民族、性、階級などは特定の視座から見た共通項に過ぎず、「個別の概念範疇はそれを構築する人々の諸利益と目的から切り離すことはできない」のである (Horn 2007: 412)。

3. 米社会言語学の萌芽期における分析概念「人種」

社会言語学では、白人社会にとって都合の良いカテゴリーや概念、枠組み、視座に基づき、この集団の利害を反映させた科学という名の権威的知識体系が構築されることになった。人種

集団を論じる際は、多くの場合、非白人諸集団の人種性を曖昧にする「アジア人」「アフリカ人」「中国人」「南アフリカ人」など地域や国に基づくカテゴリーが宛がわれた。これらの人々の言語問題を論じる際には、「階級」「性」「年齢」「民族」のように、白人集団による非白人諸集団への搾取、抑圧の構図を可視化するディスコース「人種」と「搾取」「抑圧」の組み合わせは使用せず、総じて人種問題を人種問題としては分析、議論しない傾向が強かった (e.g. Ervin-Tripp 1971; Fishman 1965, 1967, 1972b, 1972c, 1977; Gumperz 1982; Hymes 1962; Labov 1969, 1972a; Labov, et al. 1968)。1960年代中頃から1980年代中頃にかけての代表的社会言語学雑誌におけるテーマ分類を見ると分かるが、人間集団を指すカテゴリーとして明確に登場するのは「性 (sex)」のみである (表1を参照; cf. Rose 1956)。ここには、「人種」に比較的近い概念である「民族」や「エスニシティー」も含まれてはいない。もちろん、理論上は「変異と変化 (variation and change)」「社会方言学 (social dialectology)」「態度と社会心理 (attitudes and social psychology)」に含めることが可能かと思われる。いずれにせよ、当時の入門書を見る限りは、言語的要素と関連付けられる社会的変数は、「階級」を中心に「教育レベル」「性」「年齢」

表1 1960年代中頃～1980年代中頃の社会言語学各雑誌領域別投稿数

	Language in Society	International Journal of the Sociology of Language	Anthropological Linguistics	Language Problems and Language Planning	Sociolinguistics Newsletter	各領域合計
bilingualism and language contact	11	25	6	9	4	55
ethnography of speech	24		10		8	42
taxonomies and terminology	12			4	1	17
surveys	5	40	1	3	8	57
socialization	16				4	20
variation and change	14		2	2		18
semiotics	4				2	6
social dialectology	18	35	1		3	57
attitudes and social psychology	3	15	1	6		25
methodology	7		2			9
theory					7	7
conversation and interaction	26	20	2		18	66
language planning	5	20	1	20	4	50
language and sex	9	5	3		1	18
pidgin and creole languages	3	5	5			13
language ideology and language politics	5			4		9
minority languages and language death		10	2	11		23
language and education		15		8		23
migrants' second-language acquisition						0
language and the media		5				5

(Muysken 1985: 15に基づく)

「民族」「地域」「出生地」「父親の職業」「収入」などであった (e.g. Bell 1976; Dittmar 1976; Ervin-Tripp 1971; Hudson 1980; Platt & Platt 1975)。アメリカ社会では、最も頻繁に研究対象となってきた黒人の母語と人種主義の関係を議論する際、「人種」そしてそれに付随する「搾取」「抑圧」ではなく、「階級」そしてまれに「民族」の観点から分析し問題の解決を図るという非常に歪な理論と実践の関係を構築していたのである (cf. Pennycook 2021)。このような研究の定式化に最も大きな影響を与えた白人社会言語学者としてはウィリアム・ラボフ、ジョシュア・フィッシュマンが挙げられよう。表2は欧米の主要雑誌 *Language in Society*, *International Journal of the Sociology of Language* の1974年から1985年までの掲載論文引用文献表に出現した著者出現数を示したものである。ラボフ、フィッシュマンの両者は、社会言語学関連の研究雑誌では1, 2位を争う引用数を誇り、彼らが「提唱した枠組みの社会言語学が盛んであることを示している」(井出・金丸 1985: 88)。確かに、ラボフは定量分析が主体の社会言語学、フィッシュマンは定性分析が主体の社会言語学(言語社会学とも呼ばれる)という大まかな差異は見られるが、両者が用いる認識論、概念、カテゴリー、研究方法は、社会学、人類学、心理学などのディスコースを何らかのかたちで継承し、それらの学問と同様に、学者たちが生きる社会一般の認識、信念に基づいていたと言えよう (Williams 1992)。次節では、世界中の社会言語学、特に米社会言語学に基本的な認識論、概念、カテゴリー、研究方法を提供しトレンドセッターともなったウィリアム・ラボフ、ジョシュア・フィッシュマンのディスコースの中に、言語問題と人種問題との関係性を分析する上で欠かすことのできない概念「人種」とそこに内包されたカテゴリー「搾取」「抑圧」の立ち現れ方を読み取っていく。

表2 引用文献にみられる著者名出現数上位10

1.	303	William Labov
2.	252	Joshua Fishman
3.	192	Dell Hymes
4.	172	John Gumperz
5.	141	Charles Ferguson
6.	94	Erving Goffman
7.	93	Howard Giles
8.	84	Susan Ervin-Tripp
9.	74	Harvey Sacks
10.	72	Emanuel Schegloff

(井出・金丸 1985: 88)

4. トrendセッターとしての社会言語学者

まずは、言語構造と社会的変数の関係性を扱う社会言語学研究に最も大きな影響力を有し、次世代のアメリカ社会言語学の中心を担うことになる多数の弟子を輩出してきたウィリアム・ラボフ (1927-) を取り上げる。ラボフの主たる研究対象は主に米国出身アフリカ系奴隷子孫コミュニティにおける言語使用であり、白人と黒人の集团的差異、言語的差異を以下のように分析している。

合衆国の白人と黒人の話者のあいだには明確な社会階層が存在し、階級的差異というよりはカーストのようなパターンが数世紀にわたって広く見られる。我々はその結果 (中略)

非標準黒人英語が-sps, -sts, -sksという子音連続の発音に困難を抱えるという、民族間の差異を認めるのである。(Labov 1969: 26)

ラボフは人種間問題を民族間関係の枠組みで捉えている点をまずは指摘しておきたい。この枠組みでは、たとえばアングロサクソン人、ユダヤ人、米国出身アフリカ系奴隷子孫、最近移入したアフリカ人、白人、黒人もすべて民族として解釈されるため、人種間関係が平準化されてしまう (de Lepervanche 1980)。さらに、「階級」よりも語気の強い「カースト」を持ち出し白人社会を批判しているようでもあるが、この表現も所詮「階級」の一つの極、一変異である。階級である以上、各階級がそれぞれの役割、義務を果たし、社会全体が統一体として均衡を保つという解釈を可能にしてしまう (e.g. Merrill 1965; Parsons 1953)。そのような社会システムが内包する一白人社会が強要する一規範、価値に下層階級に属する黒人は自ら同意しており、よってその規範、価値に準じた言語使用が求められることになる。このような認識は、自身の社会言語学研究を教育に応用しようとする場面にも現れる。

学校の根本的な役割は標準英語の読み書きを教えることである。(Labov 1969: 1)

読書能力不足の主たる問題は、方言や文法的差異ではなくむしろバナキュラー文化と学校との文化的対立である。(Labov 1969: 43)

まず前半の引用についてラボフは、「標準英語」について批判をするまでもなく、それを学ばれるべき存在として、階級規範、価値観に基づく参照変種として、黒人コミュニティから同意を得ているかのように語っている。そして後半の引用は、その黒人の子どもたちの読書能力問題の主因が、黒人言語と「標準英語」の言語的相違にあるのではなく、「標準英語」が表象する学校文化と黒人文化の対立にあることを述べている。これについては問題点が二つ存在する。まずは、対立しているのは「バナキュラー」や「学校」という非人間的な存在ではなく黒人と白人という人間集団であるという点である (cf. Williams 1992)。教育や学校はあたかも非政治的存在であるかのように語られることが多いが、この教育制度を構築したのは白人社会であることを忘れてはならない。そしてもう一つは「文化的対立」という表現である。人種集団間の経済的、政治的、社会的抑圧被抑圧関係を議論しているのであるから、非政治的存在としての「文化」(Williams 1992: 178)、対称的關係の中での双方向性を示唆する「対立」では、白人の母語と黒人の母語のあいだに見られる非対称的、一方的な抑圧被抑圧の関係を的確に捉えることにはならないのである。このような視座は、「階層」を文化現象と捉える社会学の考え方に通底する (cf. Merrill 1965)。もちろん、上述の「カースト」の使用からも読み取れるように、ラボフは深刻な人種主義の存在を否定しているわけではないと考えられる。彼はゲットーに住むギャンググループの一員である高校生の黒人少年ジュニアについて以下のように言及する。

ジュニアは戦闘的になるように教え込まれてはいない。ここで表現された怒りはジュニア自身の思考の産物，すなわち，彼自身の経験の結果である。支配的白人社会への敵意にもかかわらず，彼はその（白人社会の）評価に関しては強い現実主義的感覚を維持してきたのである。（Labov 1969: 52）

この引用文の前後のラボフによる解説も考慮に入れれば，彼が人種主義の存在を意識しているのは間違いない。しかしながら，白人と黒人の関係を描くにあたり，単に優勢な立場であることを示す「支配的（dominant）」を使用する。ここでは「抑圧的（oppressive）」，あるいは少なくとも「支配する（dominating）」を使用しない限りは，その状況を生み出す「搾取」「抑圧」のプロセスに議論が至ることはないであろう。この「支配」には社会言語学の基本概念の一つである「権力（power）」が関連している。社会システムが生み出す「権力は（中略）社会の成員から得た「同意」を通じて，集团的目標の達成を促す」ものと位置付けられる。「すべての人々がこのプロセスから恩恵を受け（中略）「不正な権力」というものは存在しない」ことになる（Williams 1992: 55）。権力は，階級と同じく，コミュニケーションシステム（cf. Hymes 1962）を含む社会システム内の規範，価値によって生産され，社会の均衡を生成する因子に過ぎない。この権力の行使は不正行為，人種主義的抑圧行為としては成立しないのである。その結果，ラボフは，階級や性，年齢といったカテゴリーと言語形式の相関関係，根本的な経済政治的関係の是正には至らない言語教育に注目することになる。言語と社会を分離しそれらの因果関係を見ないために「言語は社会の反映」という解釈を許し，言語を社会的プロセスの一部として見なさない議論が提示されてしまう（Williams 1992: 66）。言語使用，言語教育，人種主義の搾取，抑圧的相互作用，すなわち人種主義の搾取，抑圧システムに関心が及ばないことになる。ラボフを含め社会言語学一般で頻繁に使用される用語「標準英語」についても，それと「人種」「搾取」「抑圧」との関係は全くと言ってよいほど議論されることがない。ラボフは言う。

読者は，（ラボフが論文の中で行っている）この分析が標準英語でなされていることに気づいているだろう（中略）その根本的な理由は，もちろん，定着した社会的慣習である。すべての共同体は標準英語がフォーマルライティング，パブリックコミュニケーションの唯一の適切な手段であることに同意している。（Labov 1969: 217）

ラボフのディスコースは，アメリカ国内のどの人種，民族にも一定数の標準英語使用者がいるという考えに由来しているのであろう（e.g. Labov 1969, 1972a; Labov, et al. 1968）。しかしながら，ここでの「標準英語」は白人の言語を起点としていることは明白である。白人が築いた白人至上主義的諸制度に白人ミドルクラス英語の規範，価値が浸透し，人種差別と密接に結びついた言語差別が経済，司法，教育など諸制度内に組み込まれているため，非白人諸集団は生存

をかけて「標準英語」を学ばざるをえない状況にある (cf. Minamoto 2019; Smith 1975)。これは「同意」というよりはむしろ「強制」である。そして、この標準語論は当時の社会科学に根を下ろす階級観を共有していた。ラボフは「社会階層は社会の差異化と社会の評価の産物、すなわち、社会の正常な働きの産物である」(Labov 1972b: 44) と断言する。「階層」を規定する要因として「教育」「職業」「収入」「居住地」を挙げ、「人種」「搾取」「抑圧」は含まれない。これは、先に紹介した「階層」の定義 (Merrill 1965) に一致し、当時の社会学を支配した構造機能主義 (Parsons 1951, 1953) そのものである。この階級観を言語使用に適用すると、主に中産階級のことばを基盤とする「標準英語」は「フォーマル」な機能、労働者階級や下層階級が大きく依存する「非標準英語」は「インフォーマル」な機能に割り当てられ、両変種の関係は「相補的」(Fishman 1967) なものとして解釈される。各階級の成員が集団的規範、価値に基づきそれぞれの地位に期待される役割、義務を果たすことで、アメリカという言語社会システムが均衡を保ち機能することが示唆される。「標準英語」を学ぶ「機会の平等」(e.g. Mead & Mead 1965; Roucek & Warren 1966) が保障されれば、その後の社会的上昇は個人の問題とする考え方が伺える (cf. Labov 1969)。しかしながら、この状況を「人種」そしてそれに付随する「搾取」「抑圧」というカテゴリーを導入し分析するとどう解釈できるであろうか。白人社会は経済的、社会的搾取を遂行するため、自身が構築した自身の経済的、社会的優位に資する諸制度 (教育、司法・行政・立法、メディア、経済など) の基盤、規範の一部と化した自身の英語変種を、それらの制度を通じて非白人諸集団が「同意」と誤認するまで普及、正当化し、非白人諸集団一般が受け入れざるを得なくなる、という状況に過ぎないことになる。言い換えれば、ラボフは自らのステータスでもある白人エリートとしての特権や権力を、白人社会で受け継がれてきた「標準英語」を通し維持しようとしているに過ぎないと言える (cf. Cooper 1989)。

次に、言語使用と政治、経済、教育等との関係性にフォーカスを当てる社会言語学研究に最も大きな影響力を有し、より社会学的なディスコースを使用していた白人学者としてジョシュア・フィッシュマン (1926-2015) のディスコースを見てみよう。まずは、本稿の中心的テーマである分析概念「人種」はどのように扱われているだろうか。自身そしておそらくは白人社会が広く共有する「人種」概念への認識をフィッシュマンは以下のように描写している。

今世紀 (20世紀) 初頭には (中略) この用語 (人種) は科学界そして一般社会から当然のごとく非難にさらされた。(中略) 今日、多くの学者が「民族への所属」について言及している。(中略) 私たちは平等主義的信念と圧力にさらされ、あまりに困惑し (黒人が関係している場合でも) 「人種」について語るができないでいる。(Fishman 1965: 74)

「搾取」「抑圧」を目的とし人類を分類する「人種」と、黒人に対する白人による搾取、抑圧のプロセスを分析する際の「人種」は意味合いが異なる。白人集団と非白人諸集団の言語行動、

態度上の関係性を「搾取」「抑圧」のプロセスという観点から共時的かつ通時的に分析すれば、そこには自ずと「人種」が分析概念として導入されると考える。白人集団による「搾取」「抑圧」の結果、非白人諸社会の言語使用がどのような状態にあるのか、なぜどのように特定の言語変種を使用しているのかを分析するために「人種」が必要であることを真摯に説明すればいいのではないだろうか。黒人をはじめ非白人諸集団は、白人集団が自らの人種主義的搾取、抑圧行為とそれに付随する態度を研究対象とするのであれば (e.g. Stefancic 2012), 非白人諸集団はそのような議論を歓迎するはずである。非白人諸集団は経済、政治、社会的搾取、抑圧のために利用されてきた「人種」を弾劾しているのであり、人種主義的搾取、抑圧行為の分析を可能にする、重要な集団的アイデンティティーとしての「人種」を批判しているわけではないのである。

フィッシュマンが指摘するような風潮のために「人種」を使用しないのであれば、あるときは「階級」を下位範疇として包含し、またあるときはその下位範疇として機能する集団カテゴリーが必要になってくる。そこで、先に取り上げた社会学者群、黒人言語を研究するウィリアム・ラボフと同じく、フィッシュマンは「人種」の代替表現として「民族」をほぼ排他的に使用する。1970年代の非白人諸集団による公民権運動、集団自決運動をフィッシュマンは以下のように解釈する。

エスニシティーに対する社会的関心の最近の高まりは、社会科学者のあいだでもエスニシティーへの関心を再燃させた(中略)見るからにより多くの個々人が、非西欧および西欧で、最近になって、つい数年前以上に自らのエスニシティーを認識し、さらには強調するようになっている。(Fishman 1977: 15)

ここでは「エスニシティー」つまり「民族」が念頭に置かれているが、フィッシュマンは主として公民権運動を念頭に置いていることから (cf. Fishman 1977: 42, n. 1), この概念が白人による搾取、抑圧への抵抗と人権達成の戦いを繰り広げるアフリカ系アメリカ人、メキシコ系アメリカ人、ネイティブアメリカン、アジア系アメリカ人たち、すなわち特定の「人種」集団を対象としていることは明らかである。確かに、それぞれの人種集団内には下位集団として民族が内包されているため (たとえば、アフリカ系アメリカ人は米国出身アフリカ系奴隷子孫、アフリカ大陸からの最近の移民等さまざまな集団を含む)、「民族」も必要不可欠な概念ではある。しかしながら、白人が人種分類を基に非白人諸集団 (混血を含む) を間接、直接に搾取、抑圧するという図式が存在する以上、「人種」を欠かすことはできないのである。つまり、どちらかを排他的に使用するという問題ではなく、どちらかがより影響力があり適切かという問題でもなく、柔軟に両者を運用する必要があるというのが筆者の立場である。

いずれにせよ、フィッシュマンは社会学者、他の社会言語学者と同じく、エスニシティーによって被抑圧人種集団である米国出身アフリカ系奴隷子孫コミュニティにおける集団意識の

高まりを「民族」「エスニシティー」によって説明しようと試みた。この試みの一例として、フィッシュマンは以下のように黒人の言語自決運動を分析しようとした。

黒人エスニシティーの新たな高まりは、幾分は黒人英語の存在を前面に押し出した。マケドニア人エスニシティーの高まりがマケドニア語（これまでは、ブルガリア語の田舎の変種）の存在を前面に押し出した例と比較すると割合的にははるかに弱い。明らかに、エスニシティーにおける言語の顕在化は、しばしば認識される自立性と歴史性（中略）そしてエスニシティーを構成する意識（中略）と関連性がある。（Fishman 1977: 34）

フィッシュマンの議論は、黒人コミュニティの集団的特性（言語、歴史、連帯感など）を、すなわち社会心理を対象としている（cf. Fishman 1972a）。当時の社会学も民族間関係における偏見、差別の存在に目を向けながらも、前者に偏向した社会心理学的研究が支配的であった（Mackee 1993）。確かに、集団心理を理解しようとするフィッシュマンの研究自体に意義がないわけではない。しかしながら、アメリカにおける黒人英語に関わる諸現象は、基本的には白人英語の使用強制と白人からの経済、政治、その他の「搾取」「抑圧」に対する「抵抗」「要求」を表象しており、その集団的特性を構築せしめたあるいは顕在化させた人種主義のプロセスの分析を避けて通ることは、民族間関係の研究としてはあまりにも矮小化されてしまうことになる。ヨーロッパ系対アフリカ系の関係性を分析するための「人種」、アフリカ系の中でも特に米国出身奴隷子孫を分析するための「民族」、そしてそれらに伴い白人による諸行為、態度を分析するための「搾取」「抑圧」という三種のカテゴリーすべてがここでは必要であると考え。ところがフィッシュマンは、「エスニシティー」や「民族」のみを分析概念として使用し、エスニシティーを顕在化させる重要な要因である「搾取」「抑圧」プロセスを看過し、「自立性」「歴史性」「意識」といったエスニシティーの構成要素自体に焦点を当てた議論に終始してしまっているのである。以上のように、代替概念として「エスニシティー」や「民族」を使用する行為は社会言語学を含む社会科学ではありふれたものとなっていた。フィッシュマンが指摘する通り「民族」はある言語共同体を特定するためのカテゴリーとして使用されていたのは事実である。もちろん稀にはあるが、「人種」を「民族」とともに共同体カテゴリーの構成要素の一つとして使用する場合もあった。しかしながら、後者の場合、基本的には集団間の境界線を認識するための手段として用いられているに過ぎず、集団間関係を生産する「搾取」「抑圧」プロセスという観点からの議論は、非白人諸集団に属する学者以外にはほとんど見られなかった（e.g. Bailey 1973; Ladner 1973; White 1984）。

そして、黒人たちのことば、そしてそのことばを使用する人々に対する人種主義的搾取、抑圧に関する議論を骨抜きにするあるいは歪曲する、当時の社会言語学で広く受け入れられていたもう一つのディスコースとして標準英語論がある。フィッシュマンは「標準英語」を以下のように解釈している。

（「標準アメリカ語（Standard American）」）は、話者が「標準アメリカ語」を使用しそれだけを使用するほかのいかなる交流ネットワーク（中略）にも基づいていない。（中略）「標準アメリカ語」そのものは「国民の象徴的な統合という機能を有する変種である。（Fishman 1972b: 30-31; Fishman 1972c: 24）

ある言語の標準変種は、全体としての国民、国民にとって最も高貴な制度である政府、教育、そして高尚文化全般を表象する変種ということになるであろう。（中略）この変種こそが、それが無くして交流ネットワークを形成することのない個々人を象徴的スピーチコミュニティあるいは「国民」へと統合する役目を果たす（中略）標準語は、多様で多数の聞き手を話者が知り得ないようなコミュニケーションでは「最も安全」なものと言える。（Fishman 1972b: 31-32; Fishman 1972c: 25）

これらの引用をまとめると、「アメリカ標準英語」はどの集団にも属さない「中立的存在」という位置付けが可能となる。なぜなら、当該変種の出所でもありこの変種によって破格の利益を保障されている白人ミドルクラスでさえも一変種のみで生活しているわけではないからである。いずれにせよ、社会言語学全般で、「標準語」は特定の人種、民族、階級からあたかも切り離された組織、地域、機能（学校や報道機関、首都圏、正書法や文法書、フォーマリティー）を有することは、特定の間人集団の利害関係やこの人々による「搾取」や「抑圧」を超越し受容された、中立的で文化的な存在として語られる傾向がある（e.g. Bell 1976; Dittmar 1976; Ervin-Tripp 1971; Fasold 1984; Hudson 1980; Holmes 2013; Labov 1969, 1972a; Platt & Platt 1975; Romaine 2000; Trudgill 1995; Wardhaugh 2010）。しかしながら、コーパスとステータスが特定集団から切り離され、他者への「搾取」「抑圧」を伴わない「標準語」などは存在しないのではなかろうか。すなわち、今日の「アメリカ標準英語」は、特に通時的に見れば、白人集団（特にその中の有力集団）に発祥し、今日も直接、間接にこの集団の社会的、経済的、教育的、政治的優位を維持しているという事実は変わらないのである（cf. Williams 1992）。この構図にトークンとして少数の非白人諸集団を含むことが「標準英語」を超人種的、非政治的な存在として「標準英語」を位置付けることにはなりえず、白人の利害関係と規範、価値体系から切り離すことは不可能に近いであろう。したがって、フィッシュマンをはじめ社会言語学の主流派が展開した標準語論は、科学エリート集団が自身と自身が置かれた社会の利害関係を維持するあるいは反映するかたちで主観的かつ政治的に構築したディスコースに過ぎないと言える。

そして、この「標準英語」はその対極に「非標準英語」が想定されており、これらの言語変種はコミュニケーションにおいて一定の規則に従って使用されることが述べられる。フィッシュマンは言う。

あるスピーチコミュニティ内の（中略）いかなる2人の対話者も、あらゆる特定のタイ

ミングにおいて、互いのあいだに存在する役割関係を認識するにちがいない。そのような認識は、スピーチコミュニティの存在の拠り所となる共通の規範と行動の一部を成している（中略）役割関係とは、同じ社会文化システムの成員間で暗黙に認められ受け入れられている共通の権利と義務の一式である。（Fishman 1972b: 44-45; 1972c: 36-37）

ここでフィッシュマンが言わんとすることを米国出身アフリカ系奴隷子孫コミュニティの言語使用にたとえてみる。下層階級に位置する米国出身アフリカ系奴隷子孫内のコミュニケーションにおいては、教育、ビジネス、政治など「フォーマル」な話題、場面、あるいは受信者が白人の場合は「標準英語」、家庭やコミュニティ内での「インフォーマル」な話題、場面では「非標準英語」を使用することが期待される。「アメリカ」社会の規範、価値に従って、下層階級の黒人たちは社会機能に応じて「標準英語」と「非標準英語」を切り替える義務を負わされているのである。これはフィッシュマンによる「ダイグロシア」（Fishman 1967）、ハイムズの「スピーキングのエスノグラフィー」（Hymes 1962）の基盤を成す考え方である。そしてこれは、ラボフの引用部でも指摘した、当時の社会学に深く根付いていた構造機能主義（Parsons 1951, 1953）の枠組みに基づいている（cf. Hymes 1962: n. 13）。

上述の学者たちのあいだでは、アメリカ社会一般を議論する場合、政府を含む白人社会の情報や認識が主に利用されていることが見て取れる。社会内外から横断的に見た場合、多分に人種差別構造、人種主義的抑圧や人種主義的偏見が関与しているにもかかわらず、あたかも世界中の各社会に共有される「格差」や「不平等」の普遍的な問題として、もっぱら「結果」に焦点を当てることで、人種主義的搾取、抑圧の過程を隠蔽する「階級」や「民族」の問題として扱ったのである。その結果、社会言語学は社会学と同様に、非白人諸集団が居住する社会やこの人々の行動パターンに関して白人至上主義的理論を構築したのである。階級構造から生じた文化（言語であれば「非標準語」）が継続的貧困状態を生むという主張を間接的に正当化し、その文化に生き「標準語」の習得に失敗したあるいはその使用を拒絶する個々人の自己責任によって困窮状況に留まっているという解釈が直接、間接に正当化される状況を作り出したのである。

5. 主要概念としての「人種」の確立

白人学者を含め学者一般は、たとえ批判的アプローチをもってしても、簡単には自身の生きる世界の認識からは逃れられない。今回取り上げた社会学者、社会言語学者はまさにこの状況にいますと言えよう。実際、一部の白人社会学者は、自らの生きる時代の認識、信念の影響を受けてきたことを認めている。しかしながら、人種問題の根本的解決から目を逸らす自らのディスコースが自らの意図を伴わない環境的制約の結果であるのかどうか、大いに疑問が残る部分もある。筆者には学問を超えた人間としての道徳、倫理の問題のように思えてならない。その

ような時代の認識、信念、（公には人種差別に反対するが、心の中では人種主義を支持あるいは受容しているような、そして、実際の行動は人種主義的な）手法を社会言語学者は特定のディスコースに昇華させたというのが筆者の考えである。社会的存在としての言語への回帰を目指し、言語差別の是正を試みたはずの社会言語学が、白人の諸利益を脅かす都合の悪い変数―「人種」―を基本的分析概念から排除する人種主義的ディスコースを構築していたからである。

ただし、「人種」を用いて現象を説明すれば事足りるというものでもない。「連帯感」「忠誠心」「威信」「形式度」「権力」という概念を使用し、具体的な分析までもが中道的解釈に陥り、（その意図や認識が言語化されることはないが）恣意的に特定の視座に終始するようでは、社会言語現象の十分な説明には至らない。たとえば「権力」の内部分析として、それが物質的、肉体的、あるいは心理的に誰が誰をどのようにどの程度まで「搾取」「抑圧」するのかを明示し、この「搾取」「抑圧」のプロセスが言語使用とどのように相互作用しているのかを解明する必要がある。ところが、言語および言語使用は多分に経済的、政治的な存在、現象であるにもかかわらず、白人学者集団は自身が関与する経済政治的行為、すなわち「搾取」「抑圧」の仕組みを露呈する分析を回避したのである。そして、このプロセスから生産される結果、すなわち「ダイグロシア」「言語レパートリー」「コード切り替え」「スピーキングのエスノグラフィー」等を、構造機能主義的観点から、社会システムが形成した遵守すべき規範、価値体系として構築したのである。

確かに、非白人諸集団への「搾取」「抑圧」に貢献するイデオロギー的基盤を提供してきた「人種」が非白人諸集団を惨状へと陥れてきたことは確かである。その結果、以前の人種主義的行為、態度への反省から「人種」を回避していた部分があるのかもしれない。その一方で、数世紀にわたる経済政治的搾取、抑圧の結果、今日でも「人種」に基づく差別的構造、制度、行為、信念が世界規模で確立、蔓延しており、「人種」によって差異化、搾取、抑圧された人々はその差別と闘うための集団的連帯の手段、白人集団による「搾取」「抑圧」の仕組みを理解するための手段として、まさに「人種」を必要としているのである。今こそ社会言語学はヨーロッパ中心主義に立脚した偏向的論理を構築してきたことを真に受け止め、非白人共同体における言語現象、言語問題とその人々が置かれた人種主義的搾取、抑圧プロセスとの連関を解明すべく、「人種」を主要概念の一つとして取り入れかつ再構築しなければならない。批判的人種論の先駆者の一人でもある故チャールズ・ミルズも自身の名著*The Racial Contract*において警鐘を鳴らしているように、白人至上主義的認識論とは異なる認識論から出発した概念、カテゴリー、研究方法、理論をもって既存のディスコースを再構築することが求められているのである。

注

- 1) 人種主義は人種の偏見、すなわち心理現象として定義される場合が多いが、本稿では、人種主義

的行為を含む現象として定義する。

- 2) グリン・ウィリアムズの研究は、彼がウェールズ語使用地域の出身者で、英語支配の中で生きてきた経験から出発している。彼の批判社会学的視座に基づく研究は、社会言語学で不可視化されている支配の構造を明るみに出したという点においては一つの貢献を成し遂げていると考えられる。しかしながら、彼の議論は主として白人集団内の問題に関しては有効であるが、「人種」を分析概念として使用しないため白人集団対非白人集団の問題には踏み込めていない。この主な原因は、言語帝国主義論を展開するロバート・フィリップソン (Phillipson 1992) と同じく、彼自身が白人としての認識論から出発していることにあると考えられる。彼らの対極に位置する稀有な存在としては、非白人言語集団に配慮した応用言語学の構築を提案するアラステア・ペニーック (Pennycook 2021) がいる。しかしながら、彼も既存の社会言語学、社会学で使用される概念、データなどの多くを共有し、白人中心主義的認識論からは脱し切れてはいない。
- 3) 特定集団の認識や信念を科学的ディスコースに昇華させた社会科学で、なぜ今日までノーベル賞 (経済学賞) がほぼ排他的に白人学者に与えられ、この人々が構築した知識体系が社会科学という権威的知識の中のさらなる権威、すなわちスタンダードとして確立しているのかを考えてほしい。
- 4) アメリカ社会言語学の誕生時期は一般には1960年代として語られることが多い。その一方で、言語構造と社会的変数の関連性を調査した研究は、1950年代半ばから1960年代初期にかけてすでにいくつか散見される (e.g. Fischer 1958; Gumperz 1958; Putnam & O'Hern 1955; Reichstein 1960)。
- 5) 言語学、社会言語学は人文科学に含まれることが多いが、本稿では社会科学の一部として扱う。ことばは、たとえ脳内の現象に焦点を絞る場合でも社会からは切り離せるものではなく、人間社会に欠かさない基本要素の一つに位置付けられる。社会、経済、政治、教育など人間生活のあらゆる部分の基礎を担い、そこでの人々の生活に大きな影響を及ぼしうるものである。
- 6) Metzger (1971) がこの認識を問題視している。ただし、彼の批判は、本稿が指摘する白人による主体的で集団的な搾取、抑圧プロセスには及ばない。
- 7) ジェームズ・マッキーは、1960年代に始まる黒人たちによる「民衆蜂起 (uprising/rebellion)」「白人社会は「暴動 (riot)」と命名する) を既存の人種関係社会学が予期できなかった原因は、同化主義を信奉するリベラリズムにあったと分析している。その一方で、彼は白人社会学者によって築かれた知識を体系的に批判するものの、人種隔離の要因分析に白人による搾取、抑圧プロセスの分析が含まれていないことは言及していない。

参考文献

- Alexander, Michelle. 2012. *The New Jim Crow: Mass Incarceration in the Age of Colorblindness*. New York: New Press.
- Arno, Robert F. Ed. 1980. *Philanthropy and Cultural Imperialism: The Foundations at Home and Abroad*. Bloomington, IN: Indiana University Press.
- Back, Kurt W. 1963. "Sociology Encounters the Protest Movement for Desegregation." *Phylon* 24(3): 232-239.
- Bailey, Ron W. 1973. "Economic Aspects of the Black Internal Colony." *The Review of Black Political Economy* 3: 43-72.
- Baugh, John. 2005. "Linguistic Profiling." Eds. Arnetta Ball, Sinfree Makoni, Geneva Smitherman, and Arthur K. Spears. *Black Linguistics: Language, Society and Politics in Africa and the Americas*. New York: Routledge, pp. 155-168.
- Becker, Gary S. 1971. *The Economics of Discrimination*. Second Edition. Chicago: University of Chicago Press.
- Bell, Jr., Derrick A. 1980. "Brown v. Board of Education and the Interest Convergence Dilemma."

- Harvard Law Review* 93(3): 518–534.
- Bell, Roger T. 1976. *Sociolinguistics: Goals, Approaches, and Problems*. London: B.T. Batsford.
- Ben-Eliezer, Uri. 2004. “Becoming a Black Jew: Cultural Racism and Anti-racism in Contemporary Israel.” *Social Identities* 10(2): 245–266.
- Blackshire-Belay, Carol Aisha. 1996. “The Location of Ebonics within the Framework of the Africological Paradigm.” *Journal of Black Studies* 27(1): 5–23.
- Bonilla-Silva, Eduardo. 2001. *White Supremacy and Racism in the Post-Civil Rights Era*. Boulder, CO: Lynne Rienner.
- Bonilla-Silva, Eduardo and Gianpaolo Baiocchi. 2001. “Anything but Racism: How Sociologists Limit the Significance of Racism.” *Race and Society* 4(2): 117–131.
- Bonilla-Silva, Eduardo and Tukufu Zuberi. 2008. “Toward a Definition of White Logic and White Methods.” Eds. Tukufu Zuberi and Eduardo Bonilla-Silva. *White Logic, White Methods: Racism and Methodology*. Lanham, MD: Rowman & Littlefield Publishers, pp. 3–30.
- Bonilla-Silva, Eduardo and Tyrone A. Forman. 2000. “‘I Am Not a Racist But...’: Mapping White College Students’ Racial Ideology in the USA.” *Discourse & Society* 11(1): 50–85.
- Bush, Rod. 2000. *We Are Not What We Seem: Black Nationalism and Class Struggle in the American Century*. New York: New York University Press.
- Cooper, Robert L. 1989. *Language Planning and Social Change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cross, John B., Thomas DeVane, and Gerald Jones. 2001. “Pre-Service Teacher Attitudes Toward Differing Dialects.” *Linguistics and Education* 12(2): 211–227.
- Davidson, Douglas. 1970. “The Furious Passage of the Black Graduate Student.” *Berkeley Journal of Sociology* 15: 192–211.
- de Lepervanche, Marie M. 1980. “From Race to Ethnicity.” *The Australian and New Zealand Journal of Sociology* 16(1): 24–37.
- Delgado, Richard and Jean Stefancic. 2017. *Critical Race Theory*. Third Edition. New York: New York University Press.
- Deutsch, Martin. 1965. “The Role of Social Class in Language Development and Cognition.” Paper presented at the 1964 annual meeting of the American Orthopsychiatric Association, Chicago, Illinois. *American Journal of Orthopsychiatry* 35(1): 78–88.
- Dittmar, N, Peter. 1976. *Sociolinguistics: A Critical Survey of Theory and Application*. London: Edward Arnold.
- Duncan, Garrett A. 2011. “Fostering Cultures of Achievement in Urban Schools: Toward the Abolition of the School to Prison Pipeline.” Ed. Stephen J. Hartnett. *Challenging the Prison-Industrial Complex: Activism, Arts, and Educational Alternatives*. Urbana Champaign, IL: University of Illinois Press, pp. 203–227.
- Duncan, Otis Dudley, and Beverly Duncan. 1955. “A Methodological Analysis of Segregation Indexes.” *American Sociological Review* 20(2): 210–217.
- Durkheim, Emile. 1933. *The Division of Labour in Society*. New York: The Free Press.
- Ervin-Tripp, Susan. 1971. “Social Dialects in Developmental Sociolinguistics.” Ed. Roger W. Shuy. *Sociolinguistics: A Crossdisciplinary Perspective*. Washington, D.C.: Center for Applied Linguistics, pp. 35–64.
- Fasold, Ralph. 1984. *The Sociolinguistics of Society*. Cambridge, MA: Blackwell.
- Ferguson, Charles A. 1972. “Foreword.” Fishman, Joshua A. 1972. *Sociolinguistics: A Brief Introduction*. Rowley, MA: Newbury House Publishers, pp. v–ix.
- Fischer, John L. 1958. “Social Influences on the Choice of a Linguistic Variant.” *Word* 14(1): 47–56.
- Fishman, Joshua A. 1965. “Varieties of Ethnicity and Language Consciousness.” *Monograph Series on*

- Languages and Linguistics* (Georgetown University) 18: 69–79.
- Fishman, Joshua A. 1967. “Bilingualism with and without Diglossia: Diglossia with and without Bilingualism.” *Journal of Social Issues* xxiii(2): 29–38.
- Fishman, Joshua A. 1972a. *Language and Nationalism: Two Integrative Essays*. Rowley, MA: Newbury House Publishers.
- Fishman, Joshua A. 1972b. *Sociolinguistics: A Brief Introduction*. Rowley, MA: Newbury House Publishers.
- Fishman, Joshua A. 1972c. *The Sociology of Language: An Interdisciplinary Social Science Approach to Language in Society*. Rowley, MA: Newbury House Publishers.
- Fishman, Joshua A. 1977. “Language and Ethnicity.” Ed. Howard Giles. *Language, Ethnicity and Intergroup Relations*. London: Academic, pp. 15–59.
- Giles, Howard, Richard Y. Bourhis, and Donald M. Taylor. 1977. “Towards a Theory of Language in Ethnic Group Relations.” Ed. Howard Giles. *Language, Ethnicity and Intergroup Relations*. New York: Academic Press Inc., pp. 307–348.
- Glazer, Nathan and Daniel P. Moynihan. 1964. *Beyond the Melting Pot: The Negroes, Puerto Ricans, Jews, Italians, and Irish of New York City*. Cambridge, MA: The M.I.T. Press and Harvard University Press.
- Glazer, Nathan, and Daniel P. Moynihan. 1975. *Ethnicity: Theory and Experience*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Gordon, Milton M. 1964. *Assimilation in American Life*. New York: Cambridge University Press.
- Gumperz, John J. 1958. “Dialect Differences and Social Stratification in a North Indian Village.” *American Anthropologist* 60(4): 668–682.
- Gumperz, John J. 1970. “Sociolinguistics and Communication in Small Groups.” Working Paper No. 33. Language-Behavior Research Laboratory. Berkeley, CA: University of California, Berkeley.
- Haer, John L. 1957. “Predictive Utility of Five Indices of Social Stratification.” *American Sociological Review* 22(5): 541–546.
- Hauser, Philip M. 1966. “Demographic Factors in the Integration of the Negro.” Eds. Talcott Parsons and Kenneth B. Clark. *The Negro American*. Boston: Houghton-Mifflin, pp. 71–101.
- Hazen, Kirk. 2010. “Sociolinguistics in the United States of America.” Ed. Martin J. Ball. *The Routledge Handbook of Sociolinguistics around the World*. New York: Routledge, pp. 7–24.
- Holmes, Janet. 2013. *An Introduction to Sociolinguistics*. Fourth Edition. Essex, UK: Pearson.
- Hopper, Robert. 1977. “Language Attitudes in the Employment Interview.” *Communication Monographs* 44(4): 346–351.
- Horn, Winston V. 2007. “Africology: A Discipline of the Twenty-First Century.” Ed. Nathaniel Norment, Jr. *The African American Studies Reader*. Second Edition. Durham, NC: Carolina Academic Press, pp. 411–419.
- Hudson, Richard A. 1980. *Sociolinguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hymes, Dell. 1962. “The Ethnography of Speaking.” Eds. Thomas Gladwin and William C. Sturtevant. *Anthropology and Human Behavior*. Washington, D.C.: Anthropological Society of Washington, pp. 13–53.
- 井出祥子・金丸扶美 「欧米の社会言語学の動向—二つのジャーナルの分析から」 『日本語学』 5(12), 1986年, 85–98頁.
- Isajiw, Wsevolod W. 1974. “Definitions of Ethnicity.” *Ethnicity* 1(2): 111–124.
- Johnson, Harry M. 1960. *Sociology: A Systematic Introduction*. London: Routledge & Kegan Paul Ltd.
- Kahl, Joseph A., and James A. Davis. 1955. “A Comparison of Indexes of Socio-Economic Status.” *American Sociological Review* 20(3): 317–325.

- Kurinec, Courtney A. and Charles A. Weaver III. 2019. "Dialect on Trial: Use of African American Vernacular English Influences Juror Appraisals." *Psychology, Crime & Law* 25(8): 803–828.
- Labov, William. 1969. *The Study of Nonstandard English*. Urbana, IL: National Council of Teachers of English.
- Labov, William. 1972a. *Language in the Inner City: Studies in the Black English Vernacular*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Labov, William. 1972b. *Sociolinguistic Patterns*. New York: Blackwell.
- Labov, William, Paul Cohen, Clarence Robins, and John Lewis. 1968. *A Study of the Non-standard English of Negro and Puerto Rican Speakers in New York City*. Research Project No. 3288. Volume I: Phonological and Grammatical Analysis. U.S. Department of Health, Education, and Welfare, Cooperative. New York: Columbia University.
- Ladner, Joyce A. 1973. *The Death of White Sociology*. New York: Random House.
- Lewis, Oscar. 1968. "The Culture of Poverty." Ed. Daniel P. Moynihan. *On Understanding Poverty*. New York: Basic Books, pp. 187–200.
- Lind, Michael. 1995. "Preferential Pawns: How Elites Use Affirmative Action to Placate and Divide Blacks." *The Journal of Blacks in Higher Education* 9: 68–70.
- MacKee, James B. 1993. *Sociology and the Race Problem: The Failure of a Perspective*. Urbana, IL: University of Illinois Press.
- McGrew, Teron. 1997. "The History of Residential Segregation in the United States and Title VIII." *The Black Scholar* 27(2): 22–30.
- Mead, Eugene, and Fanchon Mead. 1965. *Man Among Men: An Introduction to Sociology*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Merrill, Francis, E. 1965. *Society and Culture: An Introduction to Sociology*. Third Edition. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Metzger, L. Paul. 1971. "American Sociology and Black Assimilation: Conflicting Perspectives." *American Journal of Sociology* 76(4): 627–647.
- 源邦彦「黒人言語学史にみる人種主義の変遷—リベラリズム・ディスコース」『言語社会』第13号, 2019年, 266–279頁.
- 源邦彦「多文化共生社会における大学英語教育～人種概念の再検討～」東洋大学人間科学総合研究所 主催 研究チーム「大学の外国語教育の現状と未来—異文化理解と外国語教育—」公開研究会 テーマ「外国語教育の展望と課題—多文化共生・異文化理解・オンライン授業—」, 2021年.
- Minamoto, Kunihiro. 2019. "The Formation of the Ebonics Paradigm—Ernie Adolphus Smith and the Black Nationalist Factor." *Kokujin Kenkyū* 88: 71–86.
- Muysken, Pieter. 1985. "20 Years of Sociolinguistics." *Sociolinguistics Newsletter* 15(2): 12–19.
- Myrdal, Gunnar. 1944. *An American Dilemma*. New York: Harper & Bros.
- Omi, Michael, and Howard Winant. 1994. *Racial Formation in the United States: From the 1960s to the 1990s*. New York: Routledge.
- Parsons, Talcott. 1951. *The Social System*. New York: The Free Press.
- Parsons, Talcott. 1953. "The Revised Analytical Approach to the Theory of Social Stratification." Eds. Reinhard Bendix and Seymour M. Lipset. *Class, Status and Power: A Reader in Social Stratification*. New York: The Free Press, pp. 92–128.
- Parsons, Talcott and Kenneth B. Clark. Eds. 1966. *The Negro American*. Boston: Houghton-Mifflin.
- Pennycook, Alastair. 2021. *Critical Applied Linguistics: A Critical Reintroduction*. London: Routledge.
- Pfautz, Harold W. 1953. "The Current Literature on Social Stratification: Critique and Bibliography." *American Journal of Sociology* 58(4): 391–418.
- Phillipson, Robert. 1992. *Linguistic Imperialism*. Oxford: Oxford University Press.

- Platt, John T, and Heidi K. Platt. 1975. *The Social Significance of Speech: An Introduction to and Workbook in Sociolinguistics*. Amsterdam: North-Holland Pub. Co.
- Putnam, George N., and Edna M. O'Hern. 1955. "The Status Significance of an Isolated Urban Dialect." *Language* 31(4): v-32.
- Record, Wilson. 1974. "White Sociologists and Black Students in Predominantly White Universities." *The Sociological Quarterly* 15(2): 164-182.
- Reichstein, Ruth. 1960. "Etude des Variations Sociales et Géographiques des Faits Linguistiques: Observations Faites à Paris en 1956-1957." *Word* 16(1): 55-99.
- Rojas, Fabio. 2007. *From Black Power to Black Studies: How a Radical Social Movement Became an Academic Discipline*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press.
- Romaine, Suzanne. 2000. *Language in Society: An Introduction to Sociolinguistics*. Second Edition. Oxford, UK: Oxford University Press.
- Rose, Arnold. 1956. "Intergroup Relations vs. Prejudice: Pertinent Theory for the Study of Social Change." *Social Problems* 4(2): 173-176.
- Roucek, Joseph S., and Roland L. Warren. 1957. *Sociology: An Introduction*. Second Edition. Totowa, NJ: Littlefield, Adams & CO.
- Smedley, Audrey, and Brian D. Smedley. 2012. *Race in North America: Origin and Evolution of a Worldview*. Fourth Edition. Boulder, CO: Westview Press.
- Smith, Ernie A. 1975. "Ebonics: A Case History." Ed. Robert L. Williams. *Ebonics: The True Language of Black Folks*. St. Louis, MO: Robert Williams and Associates, pp. 77-85.
- Stanfield, John H. 1985. "The Ethnocentric Basis of Social Science Knowledge Production." *Review of Research in Education* 12(1): 387-415.
- Stefancic, Jean. 2012. "Terrace v. Thompson and the Legacy of Manifest Destiny." *Nevada Law Journal* 12(3): 532-548.
- Thomas, Melvin. 2000. "Anything but Race: The Social Science Retreat from Racism." *African American Research Perspectives* 6(1): 79-96.
- Trudgill, Peter. 1995. *Sociolinguistics: An Introduction to Language and Society*. Third Edition. Harmondsworth, UK: Penguin Books.
- Tumin, Melvin M. 1968. "Some Social Consequences of Research on Racial Relations." *American Sociologist* 3(2): 117-124.
- Vander Zanden, James W. 1973. "Sociological Studies of American Blacks." *The Sociological Quarterly* 14(1): 32-52.
- Wardhaugh, Ronald. 2010. *An Introduction to Sociolinguistics*. Sixth Edition. West Sussex, UK: Wiley-Blackwell.
- Warner, William L. 1936. "American Caste and Class." *American Journal of Sociology* 42(2): 234-237.
- Warner, William L., Marchia Meeker, and Kenneth Eells. 1949. *Social Class in America: A Manual of Procedure for the Measurement of Social Status*. Chicago: Science Research Associates.
- White, Joseph L. 1984. *The Psychology of Blacks: An Afro-American Perspective*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Williams, Glyn. 1992. *Sociolinguistics: A Sociological Critique*. London: Routledge.

(みなもと くにひこ)

Reconstructing Sociolinguistics: Race as a Principal Concept

Kunihiko MINAMOTO

Abstract

It is often said that sociolinguistics, more specifically, U.S. sociolinguistics was born as a discipline, or as a subdiscipline of linguistics in the 1960's. It seems to have inherited in large measure the epistemology, concepts, categories, and frames of reference which sociology and other social sciences had constructed. It was partly intended to restore language to a social being and/or liberate oppressed language varieties. However, it started to produce a more refined discourse which legitimized state sovereignty and the existing racialized world order as other social sciences had done. The discourse allowed and still allows oppressed varieties and their users to be liberated at one level but at the fundamental level bound to the existing racialized order. In the racialized world white supremacist behaviors and attitudes were and are reproduced while a tiny portion of the racially oppressed groups were and are incorporated into the successful "American Dream" group as a token of racial equality and individualist meritocracy. This paper discusses in what respects the then sociological discourse informed sociolinguistics in its embryonic stage. Then it sheds light on points of agreement or "complicity" between the two fields of inquiry in a perspective of critical race theory, which makes this work more than a historical recounting or a sociological critique of sociolinguistics. Its goal is to establish the author's argument that sociolinguistics must incorporate "race" as one of its principal concepts and its concomitant categories of "exploitation" and "oppression" so that it could offer an alternative epistemology and frame of analysis which contributes to further understanding of language varieties and problems of the racially oppressed.

Keywords: sociolinguistics, sociology, race, exploitation, oppression